思い出・塾生のころ

東京大学へ受験に行ったこと

上野和子（旧姓 大塚）

子どものころは、そろばんを大森の塾で習いました。毎日、友だちと通うのが楽しくていろいろな思い出があります。五級の時、検定試験を受けて合格しました。家の人もとてもほめてくれたので、その時とても自信をもってしまい、それからよけい熱心に通いました。塾では、たびたび勝残り競技があって、私はたいてい勝って残り、そのことを家の人に大いばりで報告したものでした。

福生そろばん会へは、はじめから入会しました。そして、昭和二十二年の六月に皆さんのあとについて、東京の試験場へ三級を受けにまいりました。が、今思いかえして、その日のことはあまり記憶にありません。試験場に入ったら机が少しななめになっていて、そろばんをおきにくかったこと。試験がはじまってから、監督の先生がよくまわってきて、その靴音がコツコツと大きく響いて気になったこと、など思い出されます。

その成績発表の日が、当時の珠算の教室であった青年クラブの二階の部屋で、山崎先生から聞かせていただいて大喜びしたものでした。

清水君江（旧姓 白井）

子どものころから、私はなぜかそろばんのおけいこが好きでした。その、そろばんの会ができたと聞いて、大よろこびで参加しました。教室で読上算をやって、それの成績のいい人が別の部屋でむずかしい問題をだされて、練習したことなど思い出されます。

三級の試験に東京大学まで行くと言われた時はもうこわくなりました。村田簿記学校へも通ったこともありますので東京まで行くことはなれていましたが、大学とはどんなところだろうと、びくびくでした。試験中も、早く終わってすぐ帰りたい、とそればかり考えていました。でも、家へ帰ってからはケロリとして、東大へいってきたよ、とよく自慢しました。

その三級に合格できて、十一月に二級を受験しました。その試験場で、開始直前にうしろの方の席の人が二人、試験場の先生に外へ出されてしまいました。それを知ってこわくなり、もう試験中もうわのそらで帰ってきました。

（両筆者は当校三級合格第一号）

授業前のおたのしみ

清水千代子（旧姓 吉永）

私が通ったのは、もう二十五年も前のことになります。近所の同級生二人と、一緒に通いました。習いだしたら面白くて、塾へ行くのが楽しみでした。塾では、多西、東秋留、西秋留、拝島、青梅とあちこちから通っていて、お友達もふえました。だんだん級が上ると帰りもおそくなり、ときにはお掃除当番もあたりました。帰り道、銀座通りをみんなで横に一列になり、にぎやかにおしゃべりしながら家路に向かったものです。あのころは、今のように交通も激しくなかったのです。授業前は、前の通りで、ゴムとび、馬とび、石けりなどしながら待ちました。

検定試験には、青梅一中まで行きました。今では一級もそうめずらしいことではなくなりましたが、その当時は、二級に合格して新聞に名まえがのったのです。また、珠算競技大会も青梅の小学校などで開かれ、何回か参加しました。

このごろの珠算学校のようすは、毎月の「ふっさっ子」で楽しみに拝見しております。（主婦）

二つの映画館

清水富子（清水）

私が通学していたころ、栄通りは道が悪くて、ひどくでこぼこで、雨が降ると大きな水溜りができ、車がそばを通ると逃げまわりました。映画館が二つあって、「テアトル福生」と「ニュー福生」といいました。授業をまっている間に、そこへ映画の写真を見にいったり、また雨が降っている時、清岩院の

お墓に度胸試しに行ったりしました。

そのころの先生は、山崎先生をはじめ、先生の弟さん、峰岸、清水の男の先生に、市川、島田さんの女の先生などいました。みんな良い先生ばかりで、楽しく学びました。夏は、勉強が終わってから裏のお勝手口で冷たい井戸水を飲むのも楽しみでした。

二十年後に、昔のままの教室で、子どもがお世話になろうとは夢にも思いませんでした。（主婦）

そろばんでなぐられたこと

中福生　村野光雄

ぼくがはじめてそろばんを習ったのは、小学六年生（昭和二十四年）の時でした。教室は、青年団クラブでした。そのころの山崎先生は非常に気みじかな、血気盛んな先生だったと思います。

ぼくたち中福生からは、森田昌利や村野貞夫など六年生の数人がまとまって同じ組で習いました。みんなとてもいたずら坊主でした。先生が一生懸命教えているのに、そろばんをがしゃがしゃさせたりよそみをしたりしていたものです。ある日、先生がそれのことで「カンシャク玉」をはれつさせて、僕は先生にそろばんで頭をなぐられました。この日僕は、「コンナトコ、二ドトクルモノカ」とすてぜりふを残して、家へ逃げ帰り、それっきりやめてしまいました。いさましく逃げだしたあの時のことは、今だに忘れません。

ところで、今ではうちの子どもが三級です。お父さんより上級だぞ、といばります。いばられても仕方ない、ぼくはたしかあの時七級ぐらいでしたから。

あれからもう二十何年たちました。先生、いつまでも、昔どおりの「ふっさっ子」の山崎先生でがんばってください。（会社員）

九十円のそろばん

青木礼子（旧姓吉田）

つい最近、山崎先生にご指導していただいたと思いますのに、もう三十年もたったのかと、思わず月日の流れの早さに驚きます。その後、私も学校へ行き、勤務し、結婚。そして子どもが生まれその子が、私の小さいころと同じように山崎先生に指導し

ていただいております。

私が塾生であったころは、戦後間もない二十三年でした。家は裕福でなく、九十円のそろばんをやっと買ってもらって、喜こんで毎日休まず通ったものです。当時、塾の前の道は畑道で、まさきの垣根が青々としげり、その前で馬とび、石けりなどして遊びました。そして、六年生の時、その九十円のそろばんで三級に合格しました。その時母がとてもよろこんで、やっと人なみのそろばんを買ってくれました。それからはがんばって二級にも合格できました。また珠算競技会でも上位入賞して、たくさん賞品をいただいたことなど、なつかしく思い出されます。（主婦）

熊川から本校まで

土屋勝子（旧姓小山）

私が珠算学校へ通ったころは、まだ熊川分校がなかったので、皆本校までいきました。ふつうは歩いていきましたが雨の日だけはバスで通いました。自転車で通うにも、今のように子ども専用のなんてもっている人はなかった時代です。でも、通学に苦労はあったにしても、別な楽しみがありました。ソロバンのことなんか二の次で早目に出かけていき、すぐ近くの映画館の宣伝写真を見たり、先生の家の庭に色々なきれいな花がたくさん咲いているのを眺めたりしていました。私は花が好きだったので、珍らしい花があった時など欲しくてたまらなかったのですが、そのころの山崎先生はとてもこわくて、そんなことはいい出せませんでした。

はじめての試験の時、かけ算をすっかり忘れていて零点をとったこと。五級がだいぶ長びいていやになったこと。上級になったらいろんな先生がいて、ニヤニヤでいやらしいとか、おっちょこちょいだとか、こわいやつだとか、皆でよくひそひそ話をしていました。

本校まで遠かったので、二小からの仲間はわりと少なくて、一小や三小の人たちに友だちがたくさんできました。二小は田舎者よばわりされてくやしいこともあったけど、人数が少ないので、じっとがまんしていたこともありました。でも中学校へ進んだ

授業待つ間の子どもたち

（昭和26年ごろ）

いつけんヘイワのこの子たちだが、いじめっ子・なかまはずれ・けんかなど、子どものセカイもまた、キラクなことばかりではないのだ。

時、そのソロバンで知った人が多くてとてもたすかりました。

今は子どもがお世話になっています。母親似の子で進みはおそいのですが、それより、私が経験した、目に見えない学習で、人間的成長に役立ってくれることを期待しています。

（主婦）

珠算学校で「センセイ」とよばれたこと

森田芳伸

まえに福生珠算学校生であったご縁で、私も昭和三十二年から高校生活の三年間、熊川分校の助手を経験させてもらいました。私といえども、教室では子どもたちが〝先生〟とよびます。「先生と言われるほどのバカでなし」とのことわざがありますが、これは〝先生〟と呼ばれたことのない人の負けおしみではないかと、そのころ思いました。教室で子どもたちが〝先生〟と呼んでくれることに、ある時は、有頂天になっていた私でした。

話は前にもどりますが、私はこの珠算学校で、珠算の技能以上のあれこれを学べたことを、いまも感謝しております。山崎先生は、「やる気になれ、その気になれば何でもできる」、とそんな根気強さをさとし、私もそれを身につけられたことでした。私は同級生の三人と珠算を習いはじめましたが、不器用なためにどんどんとり残されてしまいました。そのため、やる気をなくして、もうやめてしまおうと

思っていたある日、雪の日になりました。その日は、なんとなしに出かけました。そうすると先生が「今日きた人には、ごほうびにザルいっぱいの雪をやろう」と言われた。そして、雨にも雪にもめげずがんばることのたいせつさを、教えてくれたのです。

実社会にとび出してから、いろいろなことに出くわすたびに、あの雪の日のことを思い出して勇気を出し、幾度となく救われたことか。助手の当時も、このことを後輩の生徒たちに伝えました。ただ私の力不足で、後輩たちにくみとってもらえたかどうか。

しかし、上達の早い生徒は、私たちの助言を必要としないで、どんどん進んでしまった。なかに私同様、なかなか上達がおそい生徒もいたが、そんな子が進級したその時は、私たちもその子と一緒に嬉しさでいっぱいだった。その子たちは、特に教えられなくても、その努力で、必要な根気強さを身につけていったと思う。そして、大いにその経験を生かして、活躍をしているのだろうと想像しております。

助手をしていた日の楽しい思い出としては、上達の早かった子、遅かった子も、ともに進級の時はすなおに喜びあいました。授業が終わった帰り道、勉強や遊びの話をしながら帰ったり、日曜日にはよび出されて山に遊びにいったり、盆踊りに招待されたのをすっぽかして、翌日皆にしかえしされたり、そんなことがいっぱいありました。

なかには、家のつごうでこの町を去ってゆく生徒のために途中まで見送りにいき、淋しさがこみあげてくる思いをこらえたりしたこともありました。あのころの子どもたちと一緒だった楽しい日々が、今一度もどってこないものか、と考えているこのごろです。

（多摩信用金庫職員）

親子二代の通学生

青山次男

私は、昭和一桁の時代に生まれました。育ちざかりは、毎日のように、米軍の空襲におびやかされていました。

昭和十九年。福生尋常高等小学校の高等科一年（今の中学一年生）の秋から、翌年の終戦時まで、

現在の横田基地内にあった、当時の陸軍気象教育部に、学徒動員として働きました。私たち、同級生男子四十五名は、観測班と通信班、それに予報班の三班に分れて働いていたのです。これは、現在の気象庁で行なっている天気予報の仕事と同じです。

私は、同級生の十四名とともに、予報班勤務で、日本全国の主な地名の暗記と、他地区から送られてきた、天気状況、風向、風速、気圧等を地図に記入することを習っていました。そんなことで、学校の勉強はできずに、終戦を迎えたわけです。

その翌年、学校を卒業するとともに家の農業を手伝っていた時です。たまたま友人の村野忠さんから「ソロバン」を習わないかと、誘われて、福生そろばん会の別科へ入会しました。はじめて持ったそろばんは五つ珠でした。はじめは、先生が読みあげる読上算も、いつも途中でわからなくなり、何回やっても駄目でした。でも、人に負けないように、自分なりにがんばり続けました。

あれから、もう三十年にもなります。当時の別科生は、今では四十歳を越えている人が多いわけですね。

山崎先生が珠算を教えはじめたて、福生第一小学校の教室を借りての授業から、青年団クラブ（現在、第一小学校前にあるコヤマ百貨店事務所）とかわり、昭和二十四年八月には、現在地の珠算塾舎を新築し、移転をしたものです。その引越しには、リヤカーを生徒の家から借りうけ、大物の長机等を私たちが運びました。椅子等小物類は、塾生の中学生や高校生が、手に持って運びました。その時の道路は、現在ある市役所前の栄通りで、そこには雑草がいっぱい生えていました。

引越し後は、教室も明かるく、みんな楽しく珠算学習に励げみ、別科生の中からも、三級合格者が出ました。そのころは、まだ戦後の混乱時で、若い人は高校にも思うように行けないで社会人となり、勤めに出ていた人が多いのです。その人たちのために、山崎先生は珠算ばかりでなく、簿記等も教えてくださったわけです。

教室中央の柱には、テングのお面が掲げられていました。珠算を習っている人達がテングにならないように、という意味だったでしょう。これは塾生の設楽武男さんや村野徳平さんたちが、一月二日の拝島大師（昭島市）に、買ってきて掲げたそうです。

私たち別科生は、お互いに見聞を広めるために、新年会や忘年会を仲間で計画実施し、仲良く珠算を習っていました。また、塾生（中学生以上）で野球部をつくり、今は亡き清水強さんに部長をお願いし、当時の高校生たちのチームと試合をやったり、塾生が部落別に分れての試合もしました。みんなでハイキングにも行って、楽しいゆかいな思い出もたくさんあります。

私の就職には、この珠算の技術と、先生が開いてくれた社会人学級などでのいろいろな勉強、そして簿記も習っていたので、それがとても役立ちました。そして先生の紹介により、アルバイトとして役場に勤務するようになり、それがきっかけで現在に至っています。勤めも早や二十年を過ぎました。結婚後十七年、上の子は高校生です。この子は小学校三年生の秋から珠算学校に入り、中学生の時二級に合格。下の子もいま、小学六年生で、一年前に三級に合格しました。

山崎先生が「ソロバン」を教えはじめたころ、昭和二十二年四月の福生町の人口が、一四、〇〇〇人。昭和四十五年七月には市制施行され、五十二年四月の人口は、四七、〇〇〇人に。満三十年でこれだけ人口も増えているのです。

塾舎新築当時は、珠算塾のまわりも畑ばかりで家はかぞえるほど、道路はみんな砂利道でした。今では、畑はなく、家が建ち並び、道路も舗装され外灯もついて、明かるくなりました。昔のおもかげを残している木造校舎で、今も多数の生徒が通学しています。

あのころの別科生が三年ほど前に、そろばん会同窓会を開き、二十数年ぶりに顔を合せ、昔話に花を咲かせました。みんな立派な、おとうさん、おかあさんになられていたが、これからまた十年も過ぎてあうと、どんな顔になっているかなあ、自分もキットおじいちゃんになっている、なんて思い、時の流れの早さにおどろいています。

（福生市役所職員）

「子供」と「勉強」

比留間　一　子

私がそろばんを習い始めたのは、確か小学校四年生のとき。福生珠算学校熊川分校に、三年間通いました。当時、先生のなかに大学生のお兄さんがいた。それがのちに、福生市役所の広報係長をしていらっしゃった宮城さんで、私が新聞社に勤めるようになって、初めて市役所へ取材に行ったとき、お互いに顔を見合わせてびっくりしてしまいました。

私が、そろばんを習うようになったのは、ただ父と母に勧められたからで、その父と母にせよ、特にさし迫った理由や動機があったわけではなく、「何かひとつ身につけさせておけば」というくらいの気持ちであったようです。ですから、私も塾に通いながら、必死になって勉強をしたという記憶は、ほとんどありません。むしろ、勉強の始まる前、校舎の前の空き地でみんなと遊ぶのが楽しかったというのが本当です。

そんな勉強ぶりだった私でも、三年間の学習の効果は、てきめんで、今でも多少の暗算はこなせますし、数字に対してそれほどコワイという感じを持たないでいられます。それは多分、〝強いられた学習〟という気分ではなくて、自分から楽しみながら覚えていったからだと思います。

ひとつの事を身につけるというのは、その事に対してきびしく、何度も繰り返して習うほかに方法はないのでしょうが、それだって本人がその気にならなくてはムリ。でも、子供は本来、勉強よりも遊ぶほうが好きなのですから、どうやって〝ソノ気ニサセルカ〟が一番問題でしょう。最近、外側から要求が激しくて、子供たちは学習を強いられているようです。子供たちが内側からの欲求で学ぶようにするには、単に教え方の工夫だけではなく、まず子供を取り巻く社会全体が、体制的にも意識的にも、おおらかで人間的な環境になるように努めるのが先決ではないでしょうか。せっかちで、結果しか見ようとしない勤勉意識を改めないかぎり、子供にとって勉強は苦痛でしかないと思われます。

（アサヒタウンズ元記者）

古い古い塾生の話

高橋光子（旧姓　山本）

夕暮時、黄色い袋をさげて肩を組んだ男の子が二人、そしてまた何台かの自転車が黄色い袋を乗せて行き過ぎる。あら、息子と同級生の○○君だわ「そろばん？」と思わず声をかける。そう私も思い出す……25年ほども前、下駄の音をカラコロと、紙ばさみに手製のそろばん袋をぶらさげてのんびりと〝そろばん塾〟に通ったものだ。昭和27年頃、当時も学習塾こそ少なかったが、絵画・ピアノ・洋舞・英語・習字等おけいこ事は種々あった。が、そろばんはそれらとは異っている点が多かったように思う。授業日数、生徒数が多かったことだ。隣の太郎君も、おむかいの花子ちゃんも毎日夕方になると遊んだままの黒い手、顔で大声で互いに呼び合い通った。教室には大きなそろばんが壁にかかり、古いけれどよくふきこまれた長い木の椅子があり、生徒達は三、四人ずつ並び、足をブラブラさせて腰をかけ「目をつぶって」と歯切れのよい先生のお声がかかるまで、数秒を惜しみさわいでいた。この「目をつぶって」の一言、ほんの10秒ほど目をとじ、両手をひざに置くだけで心が静まり、そろばんにむかう態勢が出来た。何とすばらしい導入の方法であろう。今でも私は、腹が立つ時、物事に集中出来ない時、自分自身に「目をつぶって」と号令をかける。小学校五年生から中学三年生までを塾生として過した私は、先生が黒板に書かれる数字のなめらかな美しさにあこがれたり、読み上げ算の抑揚のつけ方等よく真似をし合った。声をやや鼻にかけ「ねがいましては」という具合に…。また、夢多い少女期のあこがれは助手の方々にも向けられた。当時から塾には、二商や五商の生徒さん達が、学生服姿で助手として先生のお手伝いをしておられた。今日はどの助手さんかしら、Hさんかな、Mさんだといいなと心をときめかせたり、〝なす〟だの〝かぼちゃ〟だのとあだ名を進呈したり、たのしい思い出になっている。夢中で数字を追いながら、ふとあげた目にとびこんだ紅い紅いカンナの花、問題を解きおえ、ホッと見る窓にゆれていたコスモスのやさしさも、忘れることは出来ない。

珠算の思い出と共に浮んでくるのが「映画」である。当時福生には、テアトル福生とニュー福生という、二つの映画館があった。場所は、市役所通り、現在のトヨタ多摩の所であった。塾への往復には、往きは銀座通りを塾へ、帰りは回り道をして映画館の前を通り、看板やスチール写真をみるのを常としていた。その頃福生は、基地の町として風紀上多くの大きな問題をかかえていた。中学校では、映画に関しても「今週の映画観てよい」「今週の映画観てはいけない」と二種の木の札が職員室前に出されていた。先生方には下見やら、取りしまりにと、ご苦労が多かったことと思われる。が時代の流れとはいえ、観てはいけないとされた映画でさえも、その内容は、現代の少女雑誌のマンガよりも純粋で他愛ないものではなかったろうか、と今私は思う。また、テレビのない時代であったから、日常の娯楽の中でラジオは大きな楽しみであった。特に夕方の子供番組は、とてもとても魅力的で、「笛吹き童子」「白鳥の騎子」などは、今でも〝ヒャラリ、ヒャラリコ〟と主題歌を口ずさめるほど夢中になって聞いたものだ。「そろばん行きたくないなあ」と痛切に思うのは、授業時間とその放送時間の重なる時であった。

そのラジオの強い誘惑にも負けず、五年間通い切れたのは、同級生の良き友二人のおかげであったろう。女三人寄れば何とやら、授業中もペチャクチャして「静かにしろ!!」とお叱りをうけたのも一度や二度ではなかった。中学生になると三人そろって一級検定に挑戦、私は、三回の失敗の後合格することが出来た。その後私は、高校受験を理由にそろばん塾をやめてしまった。が、五年間の塾生活で学んだものは、珠算の技術はむろんのこと、一日一日の小さな積み重ね—習慣づけ、反復練習、粘り—が大きな成果をあげるのだということ。更に、雨の日も雪の日も遠方から自転車で通いとおした、友に出会ったことだった。そして、あのころから変わらず毎月「ふっさっ子」が出ている。その事が、私の心を豊かにも、また、シャッキリともさせ、勇気づけられるのである。珠算のうでは落ちる一方、暗算にいたってはまるでダメというこの頃であるが、気分だけはまだまだ塾生の私である。

（主婦）

あとがき

第四集のために、「福生の選挙あれこれ」を書いていただく予定であった、佐藤三郎氏の文が載せられなかったのは、佐藤さんやまた読者の皆様に申訳ないことでした。

佐藤さんのうけもたれたのは、選挙の記録ということで、その正確を期すために、取材活動は猛烈でした。ところが、選挙関係資料が厖大なため原稿〆切り日を過ぎてなお、その奔走が続く状態であり、編者としては、今回はその一部分なりでと話しあいました。しかし筆者ご自身から、次号に発表をというご意志のかたいことで、そのようにさせていただきました。

しかし、他についてははじめの企画どおりの第四集がここに発刊できました。執筆者とそれに協力いただいた皆様に、心から感謝申上げます。

『ふっさっ子』とはいえ、周辺地域との関連をと、第二集では秋川市の石川丈夫氏に執筆していただき、この号では羽村町の桜沢一昭氏に特にお願いして、戦後の小学校教育にユニークな足跡を残された、今井誉次郎氏の事蹟を通じて、隣村西多摩村（羽村町）の戦後教育の一端を採り上げてみました。五集以降も、できれば、一編なりとも近隣町村のかたがたのご登場を考えてい

ます。

とまどいながらも、こうして『ふっさっ子』が第四集となれました。関係皆様に感謝し、今回もまた発刊まですべてのご面倒をお願いした、武蔵書房の桜沢さんに、厚く御礼申上げます。

山崎茂男

印略
検省

ふっさっ子　第4集

昭和五十二年五月一日　第一刷発行

編者　山崎茂男
東京都福生市志茂一九〇
電話（〇四二五）五一一〇六四六

発行所　(有)武蔵書房
東京都西多摩郡羽村町五ノ神二〇

印刷
製本　(株)昭和印刷

福生市立中央図書館

山崎茂男

大正十五年八月、福生市に生まれる。
戦後、珠算教室を経営のかたわら、この街の文化活動に微力を尽くす。
一時、小・中学校教員の経歴もあるが現在は珠算学校経営に専念。
現住所　東京都福生市志茂一九〇番地